

曾我的手によって応接セットのテーブルへ並べられてゆく写真は、どれも焼けた柿の寝室だった。

見下ろす百々は昨日、他人の財布でホーコイローに鶏のカシューナッツ炒め、春巻に水餃子とゴマ団子、さらには杏仁豆腐を食らっている。おかげで帰り道が鼻歌まじりだったことは言うまでもなく、しかしながらメッセージは就寝間際「翌日正午チーフ室集合」という短さで端末へ送りつけられていた。しこうして始められたのがこのミーティングとなる。果たして決りがあるのか。ビッグアンブル同様、その立ち位置は皆同じだ。

「想像していた規模ではないな」

証拠にこぼすハートの手は背後から伸びると、敷き詰められた写真の中から一枚をつまみ上げていった。

「そうですね。吹き飛んだのは寝室の中でもごく一部で、隣のリビングでお茶でも飲んで帰ろうかと思っただくらいです」

ストラヴィンスキもその隣でとぼけている。

だが言い得て妙と、写真には焼けて半分の丈になったカーテンと、ガラスの割れ飛んだ窓が写っていた。別のも一枚には千切れて綿をあふれさせた布団に、熱にプラスチックの角をグロテスクに溶かした衣装ケースも収められている。だがその程度で、様子は百々の

目から見てもボヤに等しい有様だった。あえて損傷が酷いものを挙げたとして、ベッドの向かい側、えぐれたように焼けたデスクの天板あたりがせいぜいである。傍らにはそのあおりを食らったらか、紙切れらしきものが押しピンに引っかかり無残とぶら下がっているのうかがえた。

「で、サカキは認めたのか」

レフはいつも通りである。そんな写真から、ジャケット姿で乙部へ顔を上げてゆく。

「春山ってサルを回していた、あいつが興行師だな。間違いない」

応える乙部がまた、つけていた壁から背を浮き上がらせていた。

「もしかしてあなた、シコルスキーの？」

二十代後半。切りそろえて間もない短髪が小奇麗な紳は同じ東洋人から見ても印象深い童顔だ。きつとアメリカでは愛嬌ある東洋人として可愛がられていたタイプに違いない。乙部は紳の第一印象をそうまとめ上げる。

そんな紳へ自宅が爆破されたと知らせた時の反応は微妙そのもので、真意を確かめるならあえてそれ以上、触れることをやめている。投げかけられた質問にただうなずき返した。「やっぱりそうだ！」

たちまち目を輝かせる榊は無邪気そのものだ。軽快とヒザを打ちつけ、逃がすものか
乙部へ指を突きつける。

「言っておきますけどあれはズルイですよ。あんな軍用下がり。そもそも機動性が違うじゃないですか。こっちの汎用じゃ頭なんて上げるヒマないです。それにフリだけじゃないんだから。ホント、早く白旗揚げないと着陸する間もなく落とされるんじゃないかって思いましたよ。抵抗なんてするだけ損。いえいえ、何も物わかりがいいんじゃないかも。今日飛ぶのかやめるのか。それと同じことです。いつもの判断ってやつですよ。むしろそうでなきゃ今頃、病院で寝転がってたでしょうからね。下手すりゃ地下の方で」

うまいこと言ってた。最後の笑いはそういう意味だろう。

「どこかで実戦経験、あるんですよね？」

一転、声を低くする。

「でなきゃ自分も落っこちるってリスクマネージメント、付け焼刃じゃあんなにギリまで攻めきれないでしょ？ 興味あるなあ。もっとも民間じゃ、あんな飛び方こそ必要ないですしね」

そうだと行ってくれ。向ける視線で懇願した。だが乙部にとってそんな榊こそ、身の上を話して聞かせる相手ではない。

「スカイエアライナーのオーナーも言っていたね」

言葉を選んで口にする。

「あんたは手堅いって。あんたこそ、そういう場面がうってつけかもしれないな」

はぐらかされ、がっかりする様があからさまだった。

「臨機応変は必要だとして変えられないルールは存在する。守り切れるかどうかはあんたが言うように、状況に惑わされることなく原理原則を自覚し続けることができるかってとこだ。混同する輩には向いていない仕事さ」

しかも引き換えに評価を受けていたなら否定してまで追及する気にはなれないらしい。ただ目でズルイ、と訴えた。剥き出しにしたからこそ諦め乙部へ首を振り返す。

「……ええ、へりは気合で飛んだりしないですからね。俺のモットーだってそんなところで」

なら決着はついたも同然だった。

「なのに、どうしてだろうな」

乙部は切り出す。

「あの夜、あんたは燃料を注がずに飛んだ」

それだけで意味するところは伝わったらしい。榊の目の奥はそのときかすかと強張って、

覆い隠して膜は張る。

「目的地を知らず飛行距離も測れない。慣れない状況を前にしたせいだと言ったところで、だからこそそんなミス、原理原則を重んじるあんたが口にできるハズがないことくらい分かっているだろ？」

確かめて、その奥をのぞき込んでいた。

「そう、あんたにミスはなかった。あったのはしっかりとしたフライトプランだけだ」
見極めるのはスリルとしか言いようがない。

「あんたは目的地を知っていた。燃料も、だから注がなかった。そして目的地を知っていたあんたこそ」

だからこそ乙部はそこで一呼吸、置く。

「首謀者だ」

やおら緊張は張り詰めていた。

続かず破顔したのは紳だ。参ったといわんばかり身をよじると呼吸困難さながら笑い始める。

「ちょ、ちょっと待って下さい。俺だってテンパりますよ。あの夜は受けた依頼にとりわけ緊張してて。その、俺は物騒なことに興味はあっても慣れてないですから。気持ちが高

ぶっついていたんです」

どう説明すればわかってもらえるのか。振り上げた手で脳天をかきむしる。

「本当は後悔してましたしね。金額じゃなくて興味が先に立っていたもんだから。でなきや、ついで、その、うっかり……」

だが続かずそこで言葉は切れていた。それきり力を失った手はダラリ、乙部の前へ投げ出される。

「……なんてあなたには、通じないですよね」
媚びることをやめた声が地を這った。

「SO WHAT のことをどこで知った？」

これまでの回りくどさを乙部は取り払う。
瞬間、榊の目は見開かれていた。

「すべての娯楽に粛清を！ 与えられる楽しみは楽しむことを義務付けられた労働だ。捕らわれた民衆へ真の喜びに続く門戸を開く！」

吐きつけ閉じたならその唇を、じんわり両側へ伸ばして笑む。

「まさかあなたみたいなのが現れるとはね。確かにリスクはありましたよ。けれど部屋も片付けさせたなら、あとは始末するだけでコトはあの男がしでかしたものと締めくくられる

はずだった。って、それこそ余計な完璧主義だったようで」

うなずくしかない顛末だろう。

「阿呆なんだよ」

榊はなじる。

「すぐ感化される。爆発物を扱うサイトで物色しましたがね、一番反応が良かったのもあの男だ。使いやすくはあったけれど、あの調子で余計なことを喋られちゃあ困るってもんだ」

「ハッキングもあんたか？」

入国管理局にあったフィリピン人、マグサイサイの件だ。しかしここでも榊の反応は曖昧を極める。覚えがないのか、それとも心当たりがあるからこそか。イエスともノーとも取れぬ仕草はただぎこちなく。首を傾げてみせただけだった。

「狼煙を合図に、迎えは必ずやってくる」

眩きは呪文のように聞こえてならない。

「やってくる」

繰り返す様は電源がおとされたかのようにでもあった。それきりだ。榊は視線をまたぐらへ落とす。

「俺は何も喋らなくなる。喋らなく……」

微動だにしなくなっていた。

「らしいわね。春山はあのバスに仕掛けた爆発物の設計図、以前からうろろしていたそのサイトで SO WHAT の事を知ったと言っているわ」
ハナが口を開く。

「現実の世界で SO WHAT とやり取りがあったのは一度だけ。20世紀CINEMAとビッグアンブルで使用した爆発物、それらと現金を駅前のロッカーで交換した時だけということよ。でもそれ以前の問題としてよ」

そこで不快もあらわと表情を歪めた。

「春山に革命なんて無理ね。アイツはただ自分が何をやりたいのか分からなかった。だから色々、流行に手も出したようだけど手ごたえはない。だのに身近にはやりたい放題で満喫するあのおばあちゃんがいる。平たく言えば嫉妬が動機ね。けれど嫉妬している自分すら認められない。だから手を出してがっかりさせられた物事と、かなわないおばあちゃんへの八つ当たりで精を出した。何が楽しむことを義務付けられた労働よ。おばあちゃんは恥知らずよ。そもそも口を開けるだけのアイツが甘え過ぎなのよ。ともかく榊だって言ってるように革命なんてガラじゃないわ。そういう側面から見ても春山は SO WHAT

に關しては完全にシロ。加わったところで後から SO WHAT のせいだ、とか文句タラタラに決まってる。わたしが SO WHAT ならこっちから願ひ下げね」

話も出来ぬほど泣いていたと聞かされていたのだから、取調べにはよほど耐えかねるいきさつがあったのだろう。ハナの口調は辛辣を極め、一蹴と共に報告は締めくくられる。

「ふん、おかげで束の間 SO WHAT という夢中になれる対象を見つけられたんだろ。それも今では過去のものだが、奴にとっては不幸中の幸いだったと言ってやれ」

「その幸いは公共の利益に反する。褒められるようなものではない」

浴びせるハートへ百合草は釘を刺し、逸れた話を元へ戻してストラヴィンスキーが口を開いていた。

「で、オツさん。榊は以降、本当に黙ったままなんですか？」

うなづく乙部になるほど、と考え込む。何をや納得してみせると今一度、写真へ身を乗り出していった。

「ならこの爆発は、そんな榊が万が一の時の証拠隠滅に仕掛けたものだ、ってことで間違いないんですね。消防の方では一番焼け方の激しかったデスクの……」

目を泳がせて探しだし、机に焦げ付いた黒いシミを押さえつける。

「コレですね。パソコンの部品だっことですが、コレが発火元だと言っています。例の玉

については現在も捜索中。ただ榊の部屋は六階なうえ周囲は住宅街ってこともあって、外へ飛び出してしまったなら見つけ出すことは難しいかもってことです」

すくめた肩で元の位置へと下がっていった。

「ちなみに」

切り出し引き継いだのはハートだ。おもむろに足元へ屈み込む。

「これがビッグアンプル周辺で回収した証拠品だ」

重たげなビニール袋を持ち上げテーブルへと乗せた。ジャリ、と音を立てたそこにはパチンコの景品交換を思わせる量である玉が入っている。

「それから」

百々は目を丸くし、足らずハートはカーゴパンツのポケットから取り出したあの小さなビニール袋もまた、その隣に並べ置いた。

「こっちは被害者の体から回収された分だ」

「どわ、グロいよ」

などと跳ね上がっているのは百々だけである。

「現場残留物の分析結果より、使用された火薬の成分は他の案件の物とも一致。爆発が馬鹿デカかった理由は近くに発電機用の燃料があったせいだな。さすがに起爆装置は欠片も

残っていない。だがこれだけあれば疑う必要はないだろう。俺から見てもビッグアップルの一件は SO WHAT の犯行で間違いない。つまり」

白目が乙部へ裏返されてゆく。

「榊が口を割れば SO WHAT の実態に手が届く図式だ」

らしい、と眉を跳ね上げ返す乙部はどこか他人事だ。

「私からも一件。入国管理局ハッキングの件で判明したことを報告しておく」

誰も注意を引き付け百合草もまた口を開く。

「改ざん者の国籍はフィンランド。エリク・ユハナ。男。二十二歳。自室のパソコンから直接、入国管理のサーバーへもぐりこんだことで特定された」

「また利用されたクチなのか？」

あまりの無防備さに疑うレフは鋭い。ハナも聞き捨てならない、とその隣で振り返っていった。

なら逸らしたように見えた目で、百合草は曾我へ合図を送る。どうやら資料は他にも用意されていたようだ。新たな写真は曾我の手により焼けた榊の部屋の上へ重ねられていった。引き付けられて誰も体は自然、そこへと傾むいてゆく。

「断定できる物証はまだない。だがこのハッカーは榊同様 SO WHAT と直接つなが

る人物と見て間違いないというのが統一の見解となっている。写真は実際にハッキングが行われた容疑者の部屋だ」

そこには海外に日本のアニメのフィギュアが大小、とんでもない数で陳列されていた。かと思えば窓という窓を、壁という壁を塞いで映画のポスターは貼られている。ほかにもコミック誌や様々なかぶり物の並ぶショーケース。ガムボールマシンにサッカーゲーム台が、むしろただ中で異質と浮き上がるパソコンを取り囲み、写真に収められていた。

前にしてデスクヘヒジをついた百合草は、互いの感触を確かめるように深く両手を握り合わせている。

「特定直後、インターポールに協力を要請。およそ二十時間前、その部屋でユハナの身柄は地元警察により確保された。同時にパソコンも押収」

「手早くてなによりだな」

くまなく眺めたハートが、文句のないことへ文句をつけていた。それが納得できない何かを感じ取っている時だけだということ、百々にもぼちぼち分かり始めている事実の一つだ。ならピンゴと百合草の話は、そこで一気に雲行きを怪しくしてゆく。

「エリク・ユハナは拘置所へ移送。途中、八人組の男に襲撃を受けている」

一斉に誰も視線は跳ね上がっていた。

「八人はエリクを奪取。車で逃走。半日が経った今も行方不明のままだ」

無論、強襲をかけたのは誰なのか、などと口にする者はいない。

「SO WHAT……」

ハナが呟く。

「後でわかったことだが、直前、エリク・ユハナ宅の一部は爆発、炎上している。残念ながらこの部屋はもう存在しない」

握り合わされていた百合草の手は、そこで解かれていった。

「狼煙を合図に……、必ず迎えはやってくる」

おもむろに呟いたのは写真を眺めていたレフだ。

最初それは何ら脈絡のないもののように思えてならなかった。だが真意はやがて軽い衝撃と共に百々へも伝わってくる。

「ああっ、神のパソコン、狼煙なんだっ！」

見知ったばかりだからこそ類似点は際立っていた。

「そうですよ。神が SO WHAT と直接つながっているからこそ、あれは迎えに行くというメッセージだったんだ」

続くストラヴィンスキーに、百合草もひとつ大きく息を吸い込んでゆく。

「類似する前例はフィンランドの一件のみだが、検挙例も少ないなら可能性を否定する根拠も薄い」

音を立てて何かは動き始めていた。

「ちなみに櫛の拘置所移送は、あさっての予定よ」

投げるハナはだからして、すでにこのミーティングの本題が何であるかを察している。「予定の移送先は新田中村拘置所。署からだと高速で一時間。地道でなら三時間たらず、つてところですよ」

教えるストラヴィンスキーもあざとい。

「予定通り行うのか？」

レフが百合草へ投げていた。

「エリクのパソコンは手元に残ったが、中をのぞくにはパスワードが必要だ。解析に時間がかかることは否めない。しかし SO WHAT が革命の開始をほのめかしている現在、待ってばかりもいられなくなった。ゆえに上はこれを脅威ととらえずチャンスだと考えている。ふまえて昨日おこなわれた討議の結果、移送は予定通り決行。強襲に備え、我々がその警備を担当することと決定した」

それはこれまでにないトーンだ。走る緊張がチーフ室の空気を一変させてゆく。ゆえに

ここで一息入れることは適切な処置で間違いないだろう。

「本ミッシェンのブリーフィングは一時間後。オペレーティングルームで行う」

唱える百合草が暗に解散を促していた。

「飛んで火にいる夏の虫だ」

のみ込みも早く証拠物件を掴み上げたのは、ハートの手だ。

「今日のAランチ、なにかしら」

横目に捉えて乙部も身をひるがえしたなら、跳ねるようにハナもソファから立ち上がってみせていた。

「いちいちち」

出る声は、昨日のアクロバットで体の至る所が筋肉痛な百々のもので間違いない。おっつけ腰を上げていった。

「百々はここまで」

指示は下りる。

「以降、待機。百々の本ミッシェンへの参加はない」

響きに一時、痛みが失せたと言えば大げさだろうか。だが確かに忘れて百々は、告げる声へ顔を上げていた。言い放った百合草はそこですでに立ち上がると、手元の書類をまと

めている。それだけだ。説明は何もない。曾我の出入りするドアへきびすを返していた。

「ちよ、ちよっと待ってください」

だからして呼び止めたのは、自惚れ以外の何ものでもないと思える。

「それってどういうことですか？」

だが聞き流せないくんだりは昨日、百々にとって起きたばかりでもあった。

「今さらあたしは邪魔ってことですか？」

言葉を選ぶ余裕などなく、百合草の足もそこで止まる。のみならずレフにストラヴィンスキもまた、廊下側のドア前からそんな百々へ振り返っていた。

「想定される状況には危険が伴う。訓練を受けていなければ知識もない職員には無理だと判断した」

ようやく聞けた説明は通り一遍が過ぎて、むしろ特例である自分のものだとは思えない。「じゃあ、昨日のことはどうなっちゃうんですか。ここにいる限りあたしにも、みんなと同じ責任があると思っっていますっ！」

我慢ならない声は大きかった。そんな百々へ百合草はようやく体を向けなおしてゆく。

「報告は曾我から聞いている。昨日はご苦労だった」

労われたところで騙されるものか、と奥歯を噛んでいた。

「昨日を認めてもらえらるなら中途半端はしたくありません。次も何か手伝わせて下さい」
返す百々にこそ迷いはない。

「都合のいいときだけなんて。中途半端なことしてるとあたしが……、きっと誰かが、怪我しちゃうと思うんです。それが、それが……」

だがどうしても先は続かなくなっていた。物騒な事態が控えていたなら禁句と、「怖い」が口に出せなくなる。

「バスへ乗り移るよう指示したのは自分だと曾我は言っている」

察して話を切り替える百合草はそつがなかった。

「今の発言の原因が曾我の指示にあるのなら、責任は指示を出した我々、管理側にある。昨日のことは明らかなミスだった。詫びたうえでなかったことと忘れてもらいたい」

おかげでまさかと視線を飛ばせば、そこで曾我は渋い顔を振って黙っていなさい、と目で訴えている。

「でないならあれは始末書扱いの行為だ。提出を義務付ける。意見があるなら今ここで聞いておこう」

求められて我に返り、百々は慌てて百合草へ視線を戻していた。だが指示などなかったと言ってしまったああの反省文が待っており、その分量に警護どころではなくなってしまい

そうだと思えてならなかった。だとして認めたとこで指示がミスとなれば、同じく従い
すごすご帰る後ろ姿しか浮かんでこない。駆け引きは卑怯がすぎた。選ばせているよう
その実、百々に何も選ばせてはくれない。

様子に見解はない、と判断しようだ。

「指示に従ったと認めるのなら、今回も同様にこなしてもらおうまでだ。よって待機。それか
ら」

百合草は言い、だから今まで触れずにとっておいたのだろう。

「次回、レポート提出のさいは十枚きっちり書いてもらおうつもりでいる。覚えておくよう
に」

とどめと食らわせ以上、ときびすを返す。その靴に汚れはなかった。光らせドアの向こ
うへ立ち去ってゆく。

「……ひ、ひどい」

完膚なきまでに打ちのめされるとはこのことか。挑んだ相手が悪いと分かっているでもや
りきれず、百々は己が身を蝕む哀れにただ耐える。

「百々さん」

向かって曾我が遠慮がちと呼びかけていた。

「さっき20世紀C I N E M Aから電話が」

「でえ？」

「できれば今日中に顔を出してほしいって、支配人さんが言ったらしたわ。何か相談があるようだったけど。帰りにでも寄ってさしあげて」

こんな場所へ、こんな時に、と思わずにはおれない。だがすでに曾我にはかばってもらった後であり、いやだ、と八つ当たりこそできなかった。

ぼんやりした頭で次の希望シフトを提出していなかったことを思い出す。つまり不要件に手をわずらわせてしまった曾我へは詫び、同じくドアの向こうへ消えてゆくその背をただ見送った。

塞がれたドアに、自分はなぜここにいるんだっけと、これから何をするんだっけと、問いかけてみる。どうにか分相応の仕事があったことを思い出せたなら、ねじ切るようにその身をひねった。

繰り返し出す足に覇気がないことは自分でもいやというほど分かっている。だが強気を装い、筋肉痛さえ隠す必要のなくなった今、そこにさらなる粘りが加わろうと知ったことではなくなっていた。このさいだ。先祖代々の因縁すら引きずって百々はドア前、レフとストラヴィンスキーの間をすり抜ける。

「ど、百々さん？」

見かねたストラヴィンスキーの手が顔の前で振られていた。

「目の焦点、合ってませんよー」

「……セクハラ、おやじ」

などと振り向きざま投げたそれが真顔だったなら、さすがのストラヴィンスキーもそこで凍りつく。

がそれ以上、どういうわけだか進めなくなっていた。何がどうしたのかと目を向けて、引き止め絡む手に百々は行き当たる。誰だとなぞったその先に、無表情と見下ろすレフを見つけていた。

「来い」

否や歩き出したレフは大股だ。

「なんっ……、ですかあっ？」

そら歩幅など合はずもない。あっという間に百々はズタ袋と引きずられる。食堂前を通り過ぎ、ロクに明かりもついていないさらに奥へと潜り込んでいった。

「ちよっ、ちよっ。何っ？」

もう、落ち込んでいる場合ではなくなる。感じるのは身の危険で、果てに瞳孔は開き切っ

ていた。

それ以上、見開いた目で防音用のヘッドフォン、イヤーマフを押さえつける。硬直するレフに引っ張り込まれたそこはほかでもない。重火器保管庫に併設された射撃練習場だった。勤務中、匿われたものと同じ物を携帯するレフだからこそ立ち入りは許可されているのか。突き当りの柵からイヤーマフを掴み出したレフは百々へ押しつけ、放っておけずついできたストラヴィンスキーもろとも隣り合う薄暗い射撃レーンへ移動している。

吊られた的は十数メートル余り先。

前に銃を引き抜いたレフは軽く引いた片足へ重心を傾けるが早い、そうしてためらうことなく引き金を絞っていた。とたんその手の中で小さくとも爆発は起き、衝撃に銃口は跳ね上がると次から次へ吐き出された葉莖が床で跳ね踊る。

音にも伝わる振動にも百々はただ肩を跳ね上げていた。

同時に思い出すものがあるとすればビッグアップルの夜で、つまりレフは移送車警護の危険を警告しているのだと理解する。だがすでに体験済みなら、ああも慌てふためくことはもうないはずだと一人ごちもした。

やがてむわん、と鉛臭さが、いやこれが火葉臭さというものか、百々の前へも漂ってくる。

まったくもって狙ったのかどうかという間合いだった。まといつかせて二発ずつ、計八発の弾を撃ち終えたレフは銃を下ろしてゆく。

「お見事」

深くうなづくストラヴィンスキーが、なにをや納得していた。答える代わりだ。レフは銃の上部を引いて元の位置へ戻し、側面の小さな突起を押し上げる。それら動作は一部始終が流れるようで、あいだ視線は一度も手元へ落ちることがなかった。

ままに呆然とする百々へ歩み寄る。握りかえたグリップをその視界へ差し出した。

「撃ってみるか？」

問う口調は至って落ち着いたものだ。

だからこそ慌てふためきストラヴィンスキーが間へ入る。

「ちよつとそれ、まずいですよ」。

「右利きも左利きもなければ反動も少なく軽い銃だ。扱い易さでは名が通っている。お前でも手順さえ覚えれば簡単に撃てる」

だがレフは見向きもしない。

百々もまた、まだ熱の残るそれを見下ろしていた。

何しろ言う通りと、それは教わらずともテレビで、スクリーンで、ごまんと目にしてき

た動作だ。なぞることなど簡単だと思えてならなかった。そして襲撃の事実さえなければ希な体験と、手にしていただろうとさえ考える。

だが襲撃が前提となった今、差し出されて初めて思い知りもする。体験済みなどと、なんの役にも立ちほしくない。だから撃ってみるか誘うレフは、想定する事態が起きたとき対峙した相手を制圧、そのために傷つける覚悟はあるのかと問いかけていた。参加させろと言う百々へ、瀬戸際でオマエは決断できるのかと確かめていた。

「だからちょっと待ってくださいって。レフはライセンスがあるから許可なく立ち入れますけど、だいたい百々さんを連れ込んだ地点でアウトじゃないですか。チーフに知れたらまた一喝、食らっちゃいますよ」

まくし立てるからこそストラヴィンスキーも気づいているに違いない。その顔へ初めてレフの視線も流れる。

「なら誰がこのことをチーフへ知らせる?」

「それは僕にきま……」

途絶えたその先は、乾いた笑いにまみれていた。

「あれ。止めずについできてる僕も同罪、かな。は、は、あはは」

「……ここ」

聞きながら百々はようやく首を振り返していた。

撃たれたところで自分がそんなことできっこない。思う。だからして断れたことへほっとしもした。けれどそれが正しい選択だと言ってレフへ顔を上げることでもできずに押し固まる。なぜなら「やらせてください」と百合草へ食い下がっていたそれが「仕事」だからだ。いつしか離れていた手に、勝手とずり落ちたイヤーマフは肩の上にあった。掛けたままで百々はひたすら投げかけられるレフの不満げな視線に耐え続ける。

そんな百々の視界から銃は、やがて諦めたように引き戻されていった。

「なら走ってもらおう」

「は？」

顔を上げたとたん投げつけられて反射的に受け止める。

「着ろッ」

のしかかかってきた重みに肩を落とせばそれもそのはずと、目の高さへ持ち上げたソレは身衣の前後に鉄板を仕込んだ防弾ジョッキだった。

「奥にヘリポートへ上がる非常階段がある。十五分だ。上まで行って戻ってこい」

「へっ。どう、して？」

しょげていた目も吊り上がる。

「つていうか十五分なんて無理っ！」

何しろ病院は地上十五階。地下から数えたなら屋上まで十六階だ。

「つべこべ言うな。今すぐ行けッ」

それでも親指の先で外をさすレフはゲットアウトと、いやロシア語なら違うハズだが、指し示していた。

様子にそれもこれも、あれもこれもだと思えて仕方ない。どれもこれもが思い上がっていたことへのあてつけなら、十枚のレポートも、呼びつけておいてのけ者にする不条理も、扱いの全てがそのとき百々の限界を超える。

「つべこべ言うに決まってるじゃんっ！」

声は本気と響いていた。

「あたしは来なくていいって、はずされたんだもんっ！ ご丁寧に案内されて、いらないうて言われたんだもんっ！ なのになんかの、必要ない、じゃんっ！」

振り上げ防弾ジョッキを叩きつけようとした。ゴツ過ぎて思うようにゆかなければ、歩み寄ってきたレフにひったくられて次の瞬間、頭からかぶせられる。

「だー。まーえー。前が、見えなあーいっ！」

「ああ、もう。百々さん、こっち、ここから手、出してください」

唸る百々に見ていられないと手を出したのはストラヴィンスキーだ。

「……にい、さあん、そーれっ」

合図と共に引っ張られて、所定位置から顔に手を出していた。すかさず脇へ回り込んだストラヴィンスキーは慣れた手つきだ。防弾ジョッキの胴囲を合わせて脇を絞めてゆく。

引っ張られて百々は仁王立ちとなり、その目と鼻の先にレフの手は突き出されていた。これみよがしだ。とたん火でも噴きそうなほどに打ち鳴らす。

「オイッ、目を覚ませッ。立ち止まっているヒマはないぞッ」

がなり立てると装備が整った百々の背を押し出した。

「走れッ」

「わひゃっ!」

つまずきかけて振り返る。

「どうしてっ!」

言うがレフは答えない。

「後ろは見るなッ。前だけ見ていろッ」

広げた両手で一步、また一步と歩み寄ってくる。とたん醸し出される壁がごとく威圧感
は一体なんだ、と言いたい。

「いいか、俺に追い越されるなッ」

うちにも追加される問答無用の新ルール。

「な、なんでっ。わけわかんないよっ!」

唸ったところで覆されそうもない。

「って、もし追い越されたらっ?」

尋ねてすぐにも後悔させられていた。

「だからそこ、どうして笑うのおっ!」

おかげで尻も持ち上がる。

「その笑顔、怖いっばあっ!」

無駄のない動作で回れ右だ。百々は走り出していった。

そうしてなら見せ場のないまま迎えるタイムリミット。案の定、百々は階段の中頃で這いつくばっていた。そらそうだ。日々鍛錬しているわけでもなければ、昨日の筋肉痛も癒えぬ体でおよそ五キロの防弾ジョッキを着込み、薄ら笑いを浮かべた大男に追われてノンストップと駆け上がったのできたのである。制限時間がどうのという前に十三階を超えた地点で体力は尽き果てていた。

「で、がっ……。はっ、吐ぐ。じ、死ぬっ。こっ、殺され、ふうう」

それでもレフは淡々、追い上げてくる。

もうだめだ。百々の脳裏を辞世の句さえ過ってゆく。

その足音はついに真下の踊り場で止んでいた。再び動き出したなら百々の傍らに辿り着く。

つまりまた手を打ち鳴らされ、大声で煽られるのかと百々はただ身構えた。だが聞こえてきたのは屈み込むレフの息遣いだけだ。防弾ジョッキのマジックテープが、ゲームオーバーを知らせて剥がされてゆく。

「納得できたか？」

脱がされた体は羽でも生えたかのようにただ軽かった。

「いいか、強襲をかけようとする奴らが素手で交戦してくるわけがない。万が一そんな相手から襲撃を受けた場合、お前をフォローしている余裕は誰にもなくなる。誰にもだ。そこでお前が武装できないと言うのなら、自分で自分の身を守るため防護服を着た上で動き回れるだけの体力が必要になる」

聞かされながら、百々はのたうつように身を起こしていた。

「だが現実是这样だ。どちらでも無理なら、お前がこの件でできる事は何も無い」
言葉はそんな百々に痛烈と刺さる。

「これはお前だけの問題じゃない。俺たちの安全を確保するためにも必要な選択だ。はずされたことをひがむのはよせ。待機する。それがお前に課せられた仕事だというだけだ」

噛みしめ顔を上げたなら、防弾ジョッキを肩にレフはそこでちゃんと聞いているのか、と言わんばかりの目を向けていた。

「なにも、しないのが？」

問いにひとつ、うなずき返す。

「それもまたチームを守る」

はずされたと嘆くチームを、だった。

「はずされたヤツには、そんな役割もない」

「あ、いたいた」

安穩、階下から響くのはストラヴィンスキーの声だ。

「レフ、そろそろブリーフィングに向かった方がいいですよ」

おっつけ螺旋の中へ突き出された顔は知らせ、引っ込め代わりに腕時計は振られる。答えるレフは手を挙げ返しただけで、その目を百々から逸らそうとはしなかった。

果たしてそれでもいやだと駄々をこねたなら次に何をさせられるのかわかったものではない、と恐れたせいではない。荒いが、それこそ百合草の端折った説明なら納得するほか

なくなる。睨むように見上げた目で、百々は小さくアゴを引いた。

「わかった。待機、してる」

おっつけ動作として、はっきりレフへうなずき返す。

見届けたレフが立ち上がってゆく。そのついでだ。つかんだ百々の体もまた引っ張り上げた。

「あと二階だ」

「ええっ！ 終わりじゃないのっ？」

「屋上まで行けば地下直通のエレベーターがある。それとも地下まで足で下りるか？」

確かに足元はエスカレーターでもなんでもない。

「明日の筋肉痛が怖いんですけど」

向けた渾身のふくれっ面は最大級の抵抗だろう。だがレフにはそれがどうしたといわんばかり伝わっていない。

「って、明日の事は考えなあいつ！」

入れ直す気合いで百々は前傾姿勢をとった。

「て、追い越されたけど、どうなるの？」

思い出し振り返る。なら明らかに考えていなかったと思しきレフの返事は、曖昧なうえ

にいただけなかった。

「夢にでも、出てくるんじゃないのか？」

「冗談っ」

それこそ百々に気合いは入る。夢のかけらも望めぬ泥のような眠りを求めると、残る階段を猛然と駆け上がっていった。

「なにもここままでしなくていいと思うんですけどね」

見送り投げたのは追いついたばかりのストラヴィンスキーだ。そこに漂う雰囲気はやれやれがちようで、踊り場で反転するとその肩をレフへ並べる。

「あいつは中途半端が誰かを怪我させる、そう言った。それは間違っていない」

「だからはっきりさせた、ってわけですか？」

分厚いレンズをレフへと向けた。単なる錯覚か。とたんちようと階段を上り始めたレフは、そんなスタラヴィンスキーの視界から逃げ出してゆくかのようにも見える。やれやれのついでだった。ストヴィンスキーは肩をすくめる。

「それに昨日、バスへ乗り移ることを止めなかったのは俺も同じだ。責任がある」
追って足をかけその先で、背が語っていた。

「中途半端は誰かを怪我させる」

「なるほど」

繰り返される言葉はどうやらなかなかの名文句らしい。返せばいい、とレフの肩もひるがえっていた。その顔は何が「なるほど」なのかを問いたげで、なら言ってるのも悪くないとストラヴィンスキーはそのとき左右へにっ、と唇を引き伸ばす。

「いえね、これじゃチーフも気苦労が増えただけってことかな、と」

見せつけレフへ人差し指を立てた。

「案外、名コンビってことですよ」

否や正す姿勢で敬礼する。

「では、お先に」

放つロケットダッシュは屋上までもつのか。

状況を問うな。目の前の課題に全力を投じろ。不条理に屈しないこの訓練は案外どこでも行われているらしい。走りっぷりにレフは垣間見る。

その背もまた消えてようやくやくだった。立ち尽くしている己を自覚する。

急に重みが蘇ったようでも防弾ジョッキを担ぎなおしていた。なら取り残されて追い上げるのも、立ち尽くす己を追い上げるのも自分だけとなる。一段ずつなどそぐわない。二段とばしだ。ひと思いに残りを駆け上っていった。

「たく、あんたら、何してる？」

挙句、向けられた乙部の目はことごとく白い。だいたい四人も乗り込めばことのほか狭い。だから仕方なかった。

そう、地下へ降りるエレベータ内、乙部と乗り合わせるなど誰にとっても計算外となる。「先に言っておくが、俺を誘うのだけはよしてくれ」

ぐったり座り込んだ百々を、横腹を押さえて壁に手をつくレフを、ひたすら荒い呼吸で仁王立ちとなるストラヴィンスキーを、一瞥した乙部は背を向ける。この距離で他人のフリか。その顔は灯る表示を見上げていった。

経て目にする色褪せた看板。

「遠すぎるよ、20世紀」

放つ言葉は哲学的と響いたが、当の本人がポロポロなら知的な雰囲気など微塵もありはしない。悪魔のような階段ダッシュに体を引きずり、百々はようやく「20世紀C I N E M A」へ辿り着いていた。

「おはようございます」

これでも一応「業界」だ。カウンター周りを整理する社員とバイト仲間へ、昼夜関係なくかわされる挨拶を投げる。

「ああ、おはようございます」

今日は出勤日だった、と驚く仲間と、ニコリ微笑む社員がいつも通りと迎えてくれた。

「支配人から連絡、いただいていたので」

明かせば用件は社員にも伝えられていた様子だ。

「ええ、聞いてます。奥で話してるから来てもらおうように言われてました。ちょうどさっき始まった所じゃないですかね？ 奥の休憩室です。希望シフトの提出もまだだったと思いますけど、ソッチは帰り際でも間に合いますから」

「すみません。うっかりしてて」

などと日々はそれどころでない過激さだったが、理由にできるような接点こそ双方にはない。

「大事な話らしいですよ」

付け加える社員は意味ありげだ。

解せぬまま百々はトートバックを肩へ掛けなおし、カウンター向こうの鉄扉を引き開ける。耳へカタカタと、いや、バラバラの方がしっくりくるか、映写機の音は聞こえ、そこ

に雑然としたいつもの事務所は広がった。使い込まれたスチールデスクに丸めて大量に突き刺された次回公開作のポスター。パンフレットに販促グッズはまだ段ボールのまま積み上げられ、各種チラシや売上報告書等々、紙が多種多様と分類されている。予定を書き込まれたホワイトボードは書いた本人しか分からない文字と複雑さで、目指す休憩室は一番奥、一段高くなった映写室の真下にあった。

無人の事務所を横切り百々は少し背丈の足りないドア前に立つ。社員が言う通りその向こうから水谷の声は微かに聞こえ、映写機の音を考慮するならノックは力強くが鉄則だろう、力を込めて拳を振った。中で声が止んだのを見計らい静かにドアを押し開けてゆく。「失礼します」

当然ながら窓はない。広さは六畳あまり。足元に伸びる階段を数段、降りた穴ぐら同然のそこに、空間の大半を埋めて置かれた机があった。その一番手前で水谷は振り返る。

「あ、百々君。いいタイミングですね。待ってましたよ」

おはようございます。

百々は頭をさげかけた。

かなわず飛び上がりそうになって押し止まる。

そう、それは机を挟んだ水谷の向こう側だ。儼然とした面持ちの田所はいた。すっかり

忘れていた。などと言ったところでそれはあの夜、交わしたやり取りについてではないだろう。今日、田所が遅番シフトだったという事実についてだ。

「これで話は一度ですみそうですね。こちらへ座って下さい」

だのに何も知らぬからこそ水谷は、田所の隣へ百々を促す。

あまりの不意打ちに回れ右で逃げ出したい衝動は山ほどか。できないなら百々は渋々足を進めていった。

「おっ」

「お」

投げてすぐ、それ以上の短さで投げ返す田所と一瞬、視線を絡ませる。

そんな百々が腰を下ろしたところでじゃあ、と水谷は断りを入れていた。

「田所君には悪いけれど百々君のためにもう一度、最初から話、させてもらいますね」

そうして座りなおす仕草はやけに改まっていて、何か厄介ごとでも起きたのか、想像せずにはおれず百々は面接以来、真一文字に結んだ唇で対峙する。

「さっき配給会社から連絡がありましたね。本年度のアカデミー賞、作品賞と監督賞、主演女優賞に撮影賞、来週から上映のバスボムがノミネートされたことが分かりました」

開いて「わぁ」と声を上げていた。

「これは今日の夜にも公式発表される内容です。伴い今、至急、文言の入ったチラシとポスターを手配してもらってます。そうですね、明後日の先行上映には間に合わないとしてもロードショーには必ず間に合う具合かな。その点では20世紀のみんなに手分けしてもらってチラシの差し替えやポスターの張りかえ、サイトの情報更新、期間が短い分、ちょっと頑張ってもらおうと思っっています」

「出来ますか」と身を乗り出す水谷の笑みは少々意地悪げだ。すぐにも緩めて冗談だと先を続ける。

「作品はもともとがミニシアター系なので、この辺で上映するのはウチだけですし、問い合わせも殺到するだろうと予想しています。前作の動員数から考えるに、おそらく今回もてんやわんやになると思いますよ。その辺り、覚悟しておいて下さい」

「てんやわんや、ですか……」
言葉に想像される光景は「20世紀ICINEMA」へ押し寄せる期待に満ちた顔に顔だった。入り乱れるとやがて、感動冷めやらぬ面持ちもまた次々にシアターを後にしてゆく。混じり合い生み出されてゆくのは渦巻く熱気にほかならず、くすみきっていた「20世紀ICINEMA」のフロアは、淋しげとすり減っていた無人の座席は、やがてうかさされ百々の中で息を吹き返してゆく。放つ熱のままに光り輝いていった。

これだ。

光景に百々は息をのむ。

この興奮を待っていたんだ。

良いものは、良い。アルバイトを決めたあのとき、望んだ光景を目の当たりとする。

「すごい、かも」

眩いていた。

「……違う、すごいっ！」

言いなおして田所へ振り返る。

「すごいね。バスボム。やっちゃったんだ」

「だからいい映画だって言ったろ」

持ち上がってゆく頬を止めることは出来ず、田所も得意げにアヒル口を尖らせてゆく。

「それを受けて明後日の先行上映会に急遽、スタンリー・ブラック監督の舞台挨拶が行われる事が決定しました。ここまで話してたんだけね」

水谷がそんな田所へ視線を送っていた。どうやらこれが無然と見えていた田所のワケらしい。やけに深刻な顔つきで田所もうなずき返してみせる。

「え、誰かここへ来るんですか？」

まもなく言い出す百々に肩を落した。

「おま、何、聞いているんだよ」

叱られたところで百々にはうまく全体が掴めていない。

「ブラック監督がウチへ来るって言ってるんだよ」

「あ、ああ、そっか」

とにかくうなずき、これでもかと伸び上がっていた。

「えええっ！ それって先行上映の舞台挨拶に監督が来るってことですかあっ？」

「そ、そうそう。そう、百々君にもやっとな理解してもらえたかな？」

相槌を打つタイミングを逃し続けた水谷のどもりは激しく、それどころではない百々の顔は田所へ向けなおされる。

「すごいよ。タドロコっ、アカデミー賞が来るんだってっ！ オスカー監督だよっ！ しかも海外からきちゃうんだよっ！ こんな小さな映画館にだよっ！ すごいよっ！ げーのーかいだよっ！」

だがその制服を掴み揺さぶり続けたとして、すでに聞かされていた田所の反応こそイマイチだ。

「あのさ、アカデミー賞はこないし、オスカーはまだ取ってないだろ。発表は来月。それに

その、げーのーかいって、なあ」

それを言うなら映画業界だ。言いたいところをぐっと飲み込んで田所は、脱げそうに落ちたジャケットの肩をぐい、と引き上げる。まあまあ落ち着いて、となだめすかさ水谷が話を元へ戻していた。

「で、ですね。もちろんブラック監督のお出迎え等、応対はわたしの方でする予定ですが、その際のお手伝いを百々君にお願いしたいと思っています」

「へ？」

掴んでいた百々の手も、田所のジャケットから離れる。

「どうでしょう、お願いできますか？」

この反応を見たらすぐにも前言は撤回すべきと知れたが「20世紀CINEMA」の人材がそれほど潤沢でないこともまた、動かしがたい事実だ。

「あ、たしがですか？ 社員の橋田さんは？」

橋田とは、さきほどカウンターであいさつを交わした社員である。

「それが次の上映作品の手配で出張になっちゃって、都合がつかないんですよ。当日の混雑を予想したらそれでなくても人手は欲しいところなんですけど。なにしろ急だったですからねえ」

「え、英語とか、喋れませんか」

近頃この手の不安が頻発している。

「それは気にしなくてもいいですよ。向こうも専属のスタッフを連れて来られるということですし、その中には通訳の方もおられるそうです。それにブラック監督自身かなりの日本ツウらしいですからね。簡単な日常会話ならできると昨日、わたしも知らされました」

話に胸をなでおろせばそれはもう、引き受けたも同然のリアクションだ。

「この急な舞台挨拶も、ちょうどお忍びできていた日本旅行中に発表が重なったせいで、監督の思い付きから押し進められた話だということですよ。でないとたった二日でスケジュールの調整なんて、なかなかできる人ではないですからね。ま、評判通り少し変わったところのある人物なのかもしれませんが、何せ芸術家の考えることです。わたしたちの思い及ぶようなところにはないでしょう」

隣で田所も、迷惑だと言わんばかりうなずいている。

「百々君には控室のセッティングをしてもらったり、お茶を出してもらったり、雑用になりますがその辺りをお願いしようと思っています。そういうのはやっぱり女の方がいいと思いますし、それにホラ、そもそもウチには女の子が少ないから」

「は？」

結局どこか一言多いが気にしては負けだ。

「どうする？ お前、やる？」

横目でうかがう田所が確かめていた。

だとして丁度とセクションCTから待機も命じられたところである。この役得を突っっぱねる理由こそ百々にはない。

「だって、せっかくだもん」

つまりあの階段ダッシュは有名人と謁見するための代償だったのか。違っていたとしても、しごき万歳。天晴無能。体の痛みもなんのその。たとえ二日後が筋肉痛の頂点だろうと世には捨てる神があれば拾う神があることを百々はスルメのごとく噛みしめる。噛みしめ今日一番の声を張り上げるのだった。

「あたし頑張ります。支配人、やらせてくださいっ！」

その後、いくつかの打ち合わせは互いの間で執り行われている。いずれも丸く収まるとやがて水谷は事務所へ上がった。

遅番勤務を控えた田所はいえ、パンを机に並べたまま飲み物を買いにフロアへ出ている。だからして百々は一人、鼻歌を響かせると「バスボム」の大入りが予想された今、提出しなければならぬシフト表へ惜しむことなく希望日を書き込んでいた。

回り続けるフィルムの音がひとときわ大きくなったのは、そんな作業も仕上がった頃だ。フロアから田所は戻ってくる。

「っと、あぶね」

その足が片方ずつ階段を降りていた。

いかにも熱そうな手つきで紙コップを置く手はかすめる。

匂いを嗅ぐまでもなくそれがコーヒーであることを百々は知っていた。それも砂糖入りのミルク抜きだとさえ言い当てることが出来る。何しろ田所が他に手を付けるところを見たことがなかったし、いつかブラックを飲んでやる、というのは田所の口癖だからだ。

案の定、香ばしくもほのかに酸い香りは広がって、百々の隣へ腰掛けた田所は二つあるパンのうち、明太子ペーストの乗ったフランスパンをつまみ上げていった。それが田所の好物であることはすでに誰もが知る事実だが、好きなものから手をつける性分であることに気付いているのは案外、自分だけかもしれない、と今日も目にした一部始終にひとりごちる。

そんな袋の口がパリリ、と控えめな音を立て破られていった。

「希望、出さないのは、てっきりお前が辞めるつもりでいるからだと思ってた」

つまり話すなら口の中へ物を入れる前かが礼儀だろうに、田所はと言えばかぶりついた

勢いを借りて話し始める。

「余計なことを言ったのは俺だし。参ったなと思ってた」

鼻歌も、そんなこんなのうち立ち消えだ。

「そんなわけないじゃん。あたしは逃げるようなこと何もしてないもん」

バスの彼女に会った今なら言える、それは言葉だろう。

「だ、な。めっちゃくちゃやる気みたいだし」

シフトに間違いがないかを確かめる百々の真剣な眼差しに、言う田所は新たな悩みの種を抱えたような顔つきだ。

「タドコロだってやめちゃだめなんだよ」

百々も口を開く。

「映写、教えてもらい始めたところなんだから」

「あのさ、フラれた事とそれは別ってことくらい分かってるつもり」

返すその決めつけこそ諸悪の根源だ。

「あたしはまだ何も……」

「それよかお前さ」

言いかけたところを、またもや田所に遮られていた。

「支配人に調子よく返事してたけど、これから当分、土日がつぶれるだろ。俺が言うことじゃないだろうけどさ、それでうまくやってけるの？」

「うまく、って、どういうことよ」

その意味ありげな言い回しこそ放っておけまい。返せばやたら慎重にコーヒを含んだ田所は、わざとらしいほど「あち」と声をもらしてみせた。

「今週、休みが多かったもんな。会ってんだろ？」

紙コップの中へと吐く。

「だったら？」

その通り、やましいことは何もない。

「今日だってその帰りだよ。もうさ、毎日、激し過ぎて足腰立たないくらいなんだから」瞬間だ。田所の口からコーヒは霧と吹き出ていた。勢いに百々は跳ね上がり、おっつけそのワケに気づいて今度はボカン、己が脳ミソを爆発させる。

「ちがああうっ！」

叫んでもろとも田所を叩き倒した。勢いに田所は紙コップの中身もろとも吹き飛んで、あつという間だ、机の上はコーヒまみれとなる。その上へ突っ伏しかけた田所はすんでのところ踏み止まると、椅子ごと猛烈な勢いであとじさっていった。

「わ、マジかよ。俺、これから仕事だって」

急ぎ確認するのは制服だ。

「だってタドコロが勝手な勘違いするからじゃんっ！」

百々はと言えば、肌を泡立たせて己がシフト表と田所のパンを机から救出する。手加減なしの一撃が幸いしたせいだ。きれいさっぱり前方へ飛び去ったコーヒーはその遥か向こうで粗相をすると、どれも汚れてはいなかった。

「それはお前がハゲ……」

安堵した田所が口にしかける。

「ハ、ハゲようと、ヅラだろうと、言うからだろ」

力技での回避がむしろいただけない。

「ちっ、ちっがうよっ。タドコロのばかっ！ 今日には階段ダッシュだし、昨日はバスだし、キリンは怒ると反省させられるし。ここんとこ毎日がめちゃくちゃハードなのっ。そういうことが言いたかっただけなのっ！」

百々こそまくし立て、そうして返せた今ならと腹へ力を込める。

「あの夜だってそう」

合図に上げるのは反撃ののろしだ。

「だいたい人の話を聞かないタドコロが悪い。勝手に決めつけてる」

「何を？」

「あたしとレフは、そんなじゃない」

指さしついでに救出したパンもまた振り回した。

「へえ。あいつ、そんな名前なんだな」

などと返す田所の着眼点はずれていたが、この際、かまう寄り道こそなしだろう。

「そう。ロシア人なんだって。なのに漢字オタクでさ。やたらデカくて愛想悪いの。それがたまに笑うとタイミングが違って、もうめちゃくちや怖いんだから。でもお年寄りには優しいわけ。わけわかんないよ。なのに仲良くなるうなんてさ。付き合うとかさ。それどころじゃないよ。おかげで人を軽いヤツみたいで見ちゃって。タドコロ、失礼過ぎる。あたしの方がっかりだよ」

これだけ言えば今頃レフはくしゃみどころか悪寒を感じていることだろう。

しかしながら納得しない田所のそれは、誰だって自分の目で見たものの方が正しいと思うからにはほかならない。

「だったらあの朝はなんだったんだよ。やけに仲、良さげだったぞ」
つっかかってくる。

「そんなのバイクからちらっ、と見ただけじゃん。分かんないよ」

とたん田所の唇は「バカにするな」とアヒルに尖っていった。

「俺には分かるわけ。だいたいお前の事、どれだけ見てると思ってるんだよ」

言葉に、とたん百々の方こそしどろもどろとなっていた。いたたまれず、ただうつむく。もう熱が出そうだ。

いや、すでに出ているのかもしれないと思う。

「いって」

気抜けた声で田所が吐いていた。

「無理して言うこと、俺も聞きたくないと思ってるから」

同時にシアターのどちらかが上映を終えたらしい。止まった映写機に、あれ程うるさかった音はふいと半減していた。つまり客の入れ替えが終われば田所の遅番シフトは始まる予定で、知っているから慌てたのだといえれば嘘ではないだろう。

「ホントは部外秘で口止めされてるんだけどさ」

迂回して、もう説明できそうにない。

「あたし今、別にもうひとつ仕事してるんだよね」

切れかけた会話を百々は懸命に捕まえなおす。

「掛け持ちしてることは支配人も知ってるよ。だから嘘じゃない」

「支配人、も？」

繰り返す田所は、どこかきょとんとした面持ちだ。

「レフはさ、その仕事先の仲間だよ。ストーカー騒ぎの後、そこに顔を出さなきゃいけないって組んでる」

休憩のない遅番は食抜きだと最後の一時間がとにかくきつい。だからしてつまんだパンを田所へ差し出していった。

「そこって昼夜の関係ない仕事場なんだよね。だからあの日も急に呼び出されて、一仕事終わったら朝になってた。タドコロが送ってくれるっていうのを断ったのはなにも、会う予定とかそんなじゃないよ」

聞き入る田所の表情はやはり冴えない。だがパンだけは受け取ってくれる。

「ホントだよ」

渡してその瞳をただのぞき込んだ。

「一晩中、ストーカー、追いかけるのが、か？」

聞かれてしばし首をかしげる。

「ちよ、ちよっと違うけど」

いやずいぶん違うが、このさいある雲泥の差は無視するに限った。

「あの朝はオフィスから送ってくれただけだよ。すごく大変な後だったから少しはいい気分でお疲れ、ってことにしたいと思うじゃん。タドコロが勝手に勘違いし過ぎるんだよ」

それでもまだ疑うならもう説明のしようがなかった。思えば気持ちは張りつめる。だからこそ伝わったか、やがて田所の眉間から余計な力は抜け落ちていった。

その顔をコーヒーまみれの机へ向ける。ありさまにうんざり息を吐いたなら、やがて百々へと向き直っていった。

「だったら確かに俺、お前から何も聞いてないもんな」

そこにいつもの笑みはまだ戻らない。

「百々はつまり、俺に期待してもいいってこと言ってるのか？」

などと勘違いを正せばそれは確かに投げかけられる問いで、とたん百々の熱もぶり返す。「え、えっとお。タドコロはさ、ここの先輩で。いろいろ教えてくれて、その、気の合う友達って感じで。でも嫌いじゃないから一緒にいて楽しいし。そんなさ、就職蹴ってまでここに残るとかって言われても……」

ともかくにも絞り出せば、しどろもどろへ拍車はかかった。そんな言葉は見る間に先細り、消えて拾い上げられなくなったところで結論へ辿り着くこともまた不可能となる。

「……ごめん。まだ、よくわかんなくて」

そもそも選択肢が二つしかないことに問題があると思えない。

「だってタドコロも監督みたいに急だもん」

振り回されて閉口していた田所だ。言えば憎まれ口こそ返してはこなかった。

バラバラと、ソロで回り続けるフィルムは今日に限ってひどく荒い。

それきり二人して黙り込む。

やがて吐き出したため息と共に話し始めたのは田所だった。

「俺もやめないし、お前もやめない。なら時間はあるってこと。いいよ、待つから」

こめられた優しさは百々にも十分伝わっている。

「そんなの、急げって言われても無理かもしれないよ」

だのに懐疑的になる自分が嫌だった。

「ま、人の気持ちって、そんなもんじゃね？」

それもこれもをさらりと流す田所は、「そうそう」といつものトーンを放ってくれる。

「就職のことは気にするなって。アレ、叔父さんの会社だから。人手が足りないんで来てくれてやつ。こっち続けたいって言ったら、気が向いたらいつでも声かけてくれってさ。って、だいたい俺、今から経理とか向かないと思うんだけどな」

明かして頭を掻いたなら、百々も思わず背広姿で帳簿をつける姿なんぞを想像していた。
「それ、すっごく似合わないよ」

「だろ？ あのおじさん、人を見る目がないんだよな。あれで会社、大丈夫か？」

もれる笑いがわずかながら、いつもを刻んで呼び戻す。

「あ、やべ。仕事、始まるわ」

首をひねった田所が腕時計の文字盤を読んでいた。端末もそのとき百々のトートバックで震えたようだ。おおっぴらにできないのだから、ここはちよūdと追い払うほかないだろう。

「ああ、ここあたしが片付けとくよ。タドコロは急ぎな」

「お。んじゃ、任せた」

田所に遠慮はない。急ぎ足でフロアへ上がってゆく。

いつもこんな調子だったろうか。見送り百々は吐いていた。

「違っていないよね」

気持ちを入れ替え端末を取り上げる。そこに一通、メールは届いていた。

「待機って聞いたとこなのに」

だが開けばなんてことはない。今日はあちこちからお呼びのかかる人気者だ。メールは

ハートからのもので、百々も帰りに通る繁華街、その一角に立つビルで午後七時に待つ、と書かれていた。その最後には遅れるな、とも添えられている。

「な、なんだろ。爆弾解除の特訓、とか？」

蒜山バスの中で戻った時はイロハを教えてやる、と言われていたのだ。

「遅れたら爆発する、とか？」

悲しいかな、妄想がもうネガティブな方にしか膨らまない。

田所の遅番シフトが始まった今、壁で針はすでに六時をさしている。遅れるわけにゆかないなら急ぎコーヒーの後始末に取りかかった。あいだついに足が攀《ツ》ろうと百々は「20世紀CINEMA」を飛び出す。

指定された場所なら知っていた。最寄り駅前の繁華街、その入り組んだ路地に建つ、ネオン管のアーチが奇抜な雑居ビルだ。

すでに日の落ちた空に星はなく、代わりとばかり色とりどりに積み上げられた看板が心揺り動かす色を夜空に放っている。

次々に見送って百々は指定時刻の五分前。指定された場所へたどり着いていた。

そんなネオン管の下で待ちぼうけるハートは何事かを話している。独り言でない証拠に

向こう側には、ズボンのポケットへ両手を突っ込み笑うストラヴィンスキーの姿があった。一見して互いの間に緊迫した雰囲気はない。

だからして合流した百々もまたアーチの奥へ案内されると「ヒッキーズダイニングバー」と文字を並べたドアを潜り抜ける。これでもかと伸びるチーズを舌尖で絡め取っていた。「美味しいっ！」

そう、蒜山バスの一件で支給されると聞いていた危険手当こそ、この待遇だったのだ。「嘘は言わん」

勧めたハートは疑っていたのかと言わんばかりだ。そんな誰もの前でマルゲリータはまだチーズをとろりとさせると、ふつふつ音を立てていた。

「だってほんとだもん。何しろ運動した後だもんね。おなかすいてたんだ、これが」

困う店内はテーマパークがごときアメリカカンな雑貨にざっくばらんと飾り付けられている。厨房前のカウンターには色とりどりの洋酒が並び、壁掛けのテレビでロック歌手がつかざくようにギターをかき鳴らしていた。BGMにした客はほかにもテーブル四つ分か。思いつい思いの話に花を咲かせ食事を楽しむさまがうかがえた。

揺さぶられて百々もスプモーニの赤いグラスを傾けてゆく。酔いさえスムーズにまわってゆくようで、耳の奥までが心地よかった。

「じゃ、僕もいただきまーす」

一口つけたグラスを置いてストラヴィンスキーも向かいから、マルゲリータへ手を伸ばす。

「ん。相変わらず美味しいですね」

「だよね」

「アルコールは大丈夫なのか？」

ほおばったその顔へ笑んで返せば、届くなり一気に半分飲み干したビールを手に、ハートも百々へ確かめた。

「強くはないけど、飲め、まあーすっ」

とそこへ運ばれてきたのはソーセージの盛り合わせだ。さらには黄金色に積み上げられたフライドポテトが、涼やかな生春巻きが、取り分け用の木製スプーンを添えたタコライスが、オールスターと並べられていった。

「わあ。すっごい」

テーブルは一気に賑わい、立ち上るスパイシーな香りの応酬に百々は皿から皿へ目を泳がせる。

「遠慮はするな、実際お前はよくやった。俺からの労いだ。今日はたらふく飲んで食え」

「はいはい、百々さん。お箸、こっちです」

早速にもストラヴィンスキーが取り皿を配ってくれる。前にしたなら遠慮なんてできはしなかった。

「じゃ、いっただきまーすっ!」

いの一番につまみあげる生春巻はしばらくぶりだ。合図にクロスするような具合でハートが残るピザを引き上げてゆく。ストラヴィンスキーもつまんだポテトの先でケチャップをすくい上げた。

「ホント、後で聞きましたけど昨日は大変だったみだいですね。お疲れ様でした」
かじりながらペコリ、頭を下げる。

「ああ、最後は二本とも引き抜いちゃったけど、解除番号、間違えてなくてよかったよ。うん」

思い起こして百々はため息をつき、笑って眺めてストラヴィンスキーがまたポテトをつまみ上げた。なら聞いてもらいたい話をもっとほかにあるはずだろう。百々は二人へ身を乗り出す。

「だってさ、あたししかいないんだよ。任せようたってさ、レフはおばあちゃんにかかりっきりだし。おかしいよ。バイクで飛び移って来るくらいなんだから。絶対実力行使だ

と思っただのに。やたらめったら優しいんだから」

とは言え、責め切れない成り行きがあったことも忘れがたい。

「つて、車、運転できなかったのはあたしだし。おぼあちゃん、重すぎて動かせなかったのもあたしなだけだ」

「百々さんがそこまで言うのはどうかと」

自虐が過ぎると眉を下げたストラヴィンスキーが笑う。その隣で店員を呼び止めると、ハートは早くも二杯目を注文していた。

「それはそれで悔しいな」

「そういうところ、見習いたいものです」

どうにもこそばゆく聞いて百々は、残りの春巻きを口の中へ押し込んだ。マルゲリータとは真逆の風味を満喫し終えたところで、すっかり入れかわった気分にも最大の疑問へとりかかることにする。

「つてさ……、レフっておぼあちゃん子とか何かなの？」

とたん届いた二杯目へ口をつけかけていたハートがつんのめった。

「どうしてそう思うんです？」

問い正すストラヴィンスキーはむしろ尋問口調だ。

「だって、おばあちゃんが日本人なんだって聞いた。漢検一級も取りたいってスゴんでたし、バスでだって……」

「相変わらず勤勉な人ですね」

そのせいとか、面持ちは感心しているのか問題視しているのかが、つかみにくい。

「何かこう日本とかさ、おばあちゃんにこだわりあるのかなって思っただけで、あたしの頭じゃ、非常時のあの行動は理解できないよ」

思い巡らせつつのぞきこんだグラスの中で、氷はいくらか溶けて始めている。薄くなつたそれを百々は囁みしめるように一口、含んだ。

「ヤツはそんなことまで喋っているのか」

ようやく二杯目を口にできたハートが目玉を裏返している。

「精一杯の世間話ですけど」

茶化したつもりがそれきりだった。ハートはむっ、と口を結んでしまう。伸ばした腕で鉄板から骨付きソーセージをつまみ上げると、その先をポテトのケチャップへ突っ込み豪快にすくい上げていった。

「あっ、ハートはまたそれをする。ほら、いっぺんに減っちゃったじゃないですか」
のぞき込むストラヴィンスキーは悲しげだ。

見向きもしないハートはソーセイジへかぶりついている。

「俺はヤツを認めん」

言葉は百々を物色していた皿から振り返らせていた。

「そう、なの？」

「やつはもともとファイアーマンだ。それもロシア軍下のな」

咀嚼に紛れ話すハートは、ただ正面を睨みつけている。

「ロシア国土の大部分は湿地帯だ。自然発火に人為的過失。何にせよ、そこに眠る泥炭へついた火を消すことがヤツのそもそもの仕事だった。俺たちとは畑が違う」

「ハート、それ個人情報漏えいです」

そんなこんなでポテトは諦めたらしい。仕方なさげとタコライスを取りわけ始めたストラヴィンスキーがピシヤリ、いさめる。だがハートにはまるで関係ないらしい。

「フン、内部の者なら誰もが知っている話だろう。ならドドも知る権利がある。そもそもヤツがばあさんのことを漏らしたなら、かまう必要はない」

「まあ、それはそれですけれど」

平らげたハートの手から残った骨が投げ捨てられていた。渋々認めてストラヴィンスキーは、タコライ스가盛られた小皿を百々へ差し出す。

「そういえば」

受け取ったついでだ。蘇ったあの一幕に百々も口を開いていた。

「バスに乗り移ったとき知り合いにロシア空軍がいて助かった、とかって言ってた」

「ええ、その火事、一旦、燃え出したら数か月続くこともある大規模火災だってことですよ。聞くところによれば広大な焦土の真ん中にパラシュートで降下。空輸を受けながら現場でキャンプを張って火を追いかけつつ消火するらしいです。消防士とはいえ一種のレンジャーって具合ですね。空軍に知り合いがいてもおかしくないかなと」

どうやらハートには取り皿が必要ないらしい。自分の分もまた確保し終えたストラヴィンスキーは、言って残りを全てハートへ向けなおしている。

「な、なんだかスゴい」

驚いてはみたものの、レフなら似合っていそうでならなかった。百々はストラヴィンスキーへ礼を言い、早速タコライスへ箸をつける。

「そんなヤツが野っ原で火を消している間だ」

などと、どうやら全ては前置きだったらしい。

「そのばあさんは庭園美術館の爆破事件で、施設ごと焼けて死んだ」

百々の動きはそこで止まる。

「SO WHAT だ」

持ち上げたきりの箸先からただ飯粒が、ぱらぱらとこぼれ落ちていた。

「おばあちゃん子か」

呟いてハートはジョッキをあおってみせる。

「やつがここへ鞍替えしたのはその事件がきっかけだ。とはいえ、どうやって潜り込んだのかまでは知らん。あれでどうして、したたかなやつだからな。だが動機が動機だ。本土とヨーロッパで蹴られた。そこで当時、一番平穩だった日本へ放り込まれた。いいか」

さかいに口調は一変する。

「こうも公私混同な捜査員など前代未聞だぞ。腕は立つかもしれんが、そのせいで頭に血の昇ったきり勝手と飛び出すようなヤツと一緒に仕事をするこっちの身にもなれ」

吐き捨てた勢いで一掴み、ハートはポテトを口の中へ押し込んだ。嘔み潰す様は鉄くずか何かのようで、少なくとも百々には美味そうに見えていない。

唇の端にタコライスのレタスをのぞかせ、ストラヴィンスキーも渋い顔でうなずきかえしている。

「らしいですね。ぼくが聞いたのもその辺りです」

「百々にまで言われたなら世話はない。知らず、一緒に危ない橋を渡れるやつがいたら、そ

「いつは馬鹿だ」

だからしてあのときレフは逃すつもりはない、といきまき単独で最上層へ向かったのかと、そしてハートは白い面が冷静に見えるとは限らないと罵り、拳句、役に立たんとまで切り捨てたのかと、思っていた。とたん解せなかったあれやこれやが百々の中で一気に霧を晴らしてゆくと、それでスッキリしたかと言えばまったく逆となる。全ては見なくともいい舞台裏をのぞいてしまったあとのガツカリした気分そっくりで、いたたまれなさに口をつぐんだ。

紛らせ、中途半端と浮いていたタコライスへかぶりつく。味について言及できるほど堪能できていない。ただ機械的に咀嚼し続ける。

「チーフも腹の底では同じだ」

言うハートにちらり、視線を投げていた。

「テロの過疎地だったとはいえ厄介者を押し付けられたと考えているからこそ、持て余している」

とハートもまた百々へそのアゴをひく。

「やつと組まされたのもそのためだ」

「え、あたしが？」

「ええ間違いないく」

すかさず口添えたストラヴィンスキーが最後の春巻きをさらっていった。理解しかねて百々は頬を歪め、あいだにも店員を捕まえハートは「バーボン」とだけ告げる。

「言っでは何だが」

続きのように話していた。

「ど素人と行動を共にすれば、当然そちらに手が取られる」

「す、すみません」

反射的とはいえ事実だ。小さくならざるを得ないだろう。

「そもそもチーフは専属で奴を百々の警護に当たらせ、捜査から退かせたかったんだろう。だが窓際同然、露骨なやり方で突飛な行動に出られてもかなわんと考えた。そこでこうなった。百々の臨時採用なんでものは苦肉の策だ」

返す言葉は欠片もなく、思い出したように百々は残るスプモーニへ口をつけた。ずいぶん薄くなったそれを飲み干すと、最後の氷を奥歯で噛み砕く。

「けれど百々さん、意外にアグレッシブだから」

微笑むストラヴィンスキーのグラスも空だ。言っではハートへ自分もバーボンをもらっていいかと確かめ、捕まえた店員へグラスの追加を頼むと百々へも次を問うて視線を投げた。

「チーフはきつと頭、痛めてると思います」

「……そか」

だからして奮起するたび、どやされるはずだと思う。気づいているだろうレフにたいした愛想がないのも当然で、今頃とれた足かせにせいせいしているに違いないとさえ想像した。皿に残ったレタスは張りつき、つまみにくくて仕方がない。それでもさらえて溜息もろとも百々はそろえた箸をテーブルへ戻す。

「明後日の件、はずされて抗議したらしいな」

などと切りだしたのはハートだ。

「そのあと、非常階段でヤツに追い回されただど？」

「へ、なんで知ってるの？」

百々は伸び上がり、向かいで頭を下げるストラヴィンスキーに目を丸くする。

「すみません。口、軽くって。あ、でもハートにしか言ってませんよ。オツさんにはバレた、かな？ そうしたらこうなりました」

果てに知らされるのは、そうまで気にかけてもらっているという事実だ。

「気に病むな。今回ばかりはヤツを遊ばせておけるような状況でなくなった。残念な部分もあるだろうが、ドドはヤツのせいで振り回されただけだ」

「ええ、チーフもやり方が紙一重です」

眉をひそめたストラヴィンスキーが、いい具合に落ち着いた腹をなでつける。椅子の背へとその身をもたせ掛けていった。

そこへバーボンはボトルで運ばれてくる。受け取ったハートは待ちかねたようにグラスを二つ、体の前へと並べ置いた。まるで儀式だ。やたらめったら慎重な手つきで琥珀色した液体を均等に注ぎ入れ始めた。

「でも、なかなかの名コンビじゃないかって僕は思ったんですけどね」

言うストラヴィンスキーは様子をどこか遠目に眺めている。

「は？」

「いえいえ、阿吽って意味じゃないですよ。百々さんに危険についてを納得させたのはレフです。示しておいて自分がおろそかには出来ないじゃないですか。だからいいバランスだと僕は思ったんです」

言われように百々は思わずあんぐりし、グラスを満たし終えたハートが鼻で笑い飛ばしてみせていた。

「ふん、反面教師か」

「ええ。狙ったところとはずれていても、百々さんがアグレッシブな分、良いおもりと見さ

せていただきました」

とはいえそれが「お守り」を意味しているのか、果たして「重り」のことなのか、百々には全く区別がついていない。「はぁ」とだけ返せばその背を、ハートの大きな手に叩きつけられていた。

「なるほど。でかしたぞ、期待のストップパー！」

「うわぁ」

勢いに体は前へ放り出され、百々のグラスもちょうどとそこでテーブルへ運ばれてくる。

「これで少しは安心して仕事ができるというわけだ」

豪快と笑うハートは上機嫌だ。

「って次、待機なんですけど」

「まあ、欠席裁判もここまでってことで」

そんなこんなを絡め取り、とにかく頃合いだとグラスを手にストラヴィンスキーが巧みと話を切り上げる。

「ようし、仕切り直しだ」

応じるハートがグラスを持ち上げていた。

「じゃ、何に乾杯を？」

求めてストラヴィンスキーの目が一同を見回す。

「え、えっと」

百々もグラスを手に空を睨めば、よほどめでたい出来事らしい。提案はストラヴィンスキーから出されていた。

「チーフには悪いですが、名コンビ誕生にとか?」

いやいや、それだけはいただけないだろう。却下して百々はみあう一大事に声を大きくする。

「そうっ! おかげであたし、あさつての舞台挨拶に来る人たちのお出迎えスタッフ、することになったんですよ」

「ほう」

ハートが眉を跳ね上げ、瓶底眼鏡の向こうでストラヴィンスキーも好奇に目を光らせる。

「へえ、誰が来るんですか?」

「スタンリー・ブラック監督」

と、時は止まっていない。単に反応が返ってこなかっただけだ。

「だ、誰です? ブラック監督って」

「ええっ、知らないんですか? 数年に一本しか作品を発表しないから映画は少ないけれ

ど、その度に話題独占の巨人匠、超有名監督ですよ。じかに会えるなんて俳優さんより確率、低いんですから」

自慢だっただけに問い返されるなど心外でならない。

「すみません。こういう仕事してるとどうも流行にはうとくなっちゃうみたいで」

「今度のアカデミー候補で、もしかしたら賞、取っちゃうかもしれないんです。今夜、ノミネートの公式発表があるって」

言っただけで、と百々は店の時計を仰ぐ。

巡る思いにハートも分厚い唇をすぼませると空を睨んでみせていた。

「同じ、あさってか……」

引き戻して投げかけた言葉はこうだ。

「なら映画の大入りと、移送の無事完了を願って乾杯はどうだ」

言葉に互いが互いの顔を見合ったことはいまでもない。次の瞬間、悪くない、と宙でグラスは鳴らされていた。